

# 浜松の横穴式石室を語る

鈴木 一有

はじめに

本講座では、浜松の横穴式石室の特徴を東海地方の横穴系埋葬施設の様相から評価する。ここでいう東海地方とは、太平洋沿岸の近畿以東、関東以西の地域をさす。現在の行政区分でいえば、三重県（伊勢、伊賀、志摩）、岐阜県（美濃、飛騨）、愛知県（尾張、三河）、静岡県（遠江、駿河、伊豆）の諸地域が相当する。

この地域における横穴式石室の伝播については、「原東海道」と「原東山道」とよべる二つの経路が深くかわる。前者は、伊勢・志摩から渥美半島を經由して遠江、駿河と海路を經由するものである。後者は美濃・尾張から信濃に至る内陸経路であり、ともに近畿地方と東国を結ぶ動脈である。二つの動脈は畿内系横穴式石室の主要伝播経路であるとともに、その狭間におかれた三河中心部では、独自性が高い横穴式石室が構築され、周辺地域にも強い影響を及ぼしている（図1）。

## 1 横穴式石室の多様性と階層

**石室分類** 東海地方における横穴式石室の推移を俯瞰するにあたり、この地域に構築された石室の分類と系統について触れておきたい（図2）。東海地方に構築された横穴式石室を大別する上では、羨道の有無が大きな要素といえる。横穴式石室は遺存状態によって天井構造が明確でない事例も多く、羨道の有無を客観

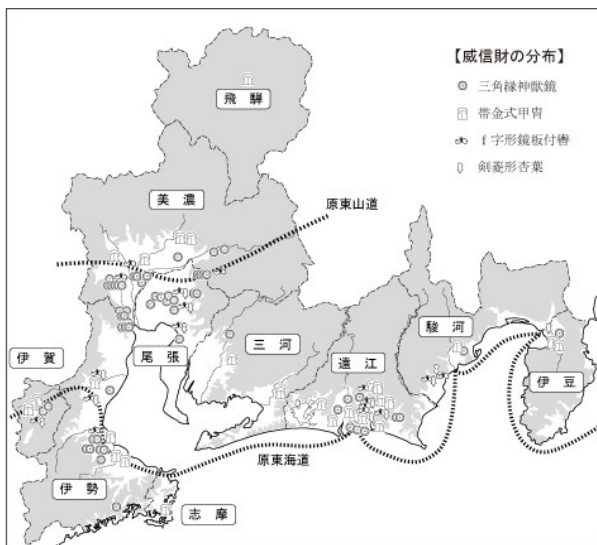


図1 東海地方における威信財の分布

的に示しにくいという制約があるが<sup>1)</sup>、羨道の有無を大別の機軸に据え、有羨道石室と無羨道石室に分離する。次に石室の形態的な遡源地から、畿内系石室と非畿内系石室に分離する。有羨道石室には畿内系石室と非畿内系石室が知られる。いっぽう、無羨道石室は系譜が不明瞭なものを含めて、非畿内系石室として位置づける。非畿内系石室には、北部九州系石室のほか、受容地における形態の定着が顕著である在来系石室がある。在来系石室のうち、とくに地域性が顕著なものについては、その中心的な地域の名称を付し、「三河系石室」というように呼称する。以下、本稿の議論の中心となる畿内系石室と、在来系石室の代表例である三河系石室の諸特徴を示しておこう。

**畿内系石室** 畿内系石室の特徴には、以下の各属性があげられる（土生田 1994）。

- 1) 単室構造である
- 2) 玄室の平面は矩形を指向する
- 3) 玄室の天井は平らである
- 4) 羨道の天井とは段差（前壁）をもつ
- 5) 玄門立柱石を指向しない
- 6) 玄門や羨門を内側に突出させない
- 7) 古い段階では多段石積み奥壁をもつ

畿内系石室は、玄室と羨道の位置関係から、片袖式と両袖式に分けられる。片袖式石室には、奥壁から羨道をみた際に右側に袖が形成される右片袖式石室と左側に袖が形成される左片袖式石室がある。右片袖式石室は、伊勢や遠江に多く分布し、左片袖式石室は、尾張や美濃に多いという分布の差が認められる。

**三河系石室** 在来系の有羨道石室については、6世紀中葉頃に西三河において成立した横穴式石室の諸特徴が広域に共有される。本稿では、三河地域に共有される諸特徴をもつ有羨道石室を三河系両袖式石室<sup>2)</sup>とする。

三河系石室には、畿内系石室の属性と異なる傾向が多く看取できる。以下、畿内系石室の属性と対応させ、次のように整理しておく。

- 1) 大型石室には複室構造が採用される
- 2) 玄室の平面形が胴張り形を指向する

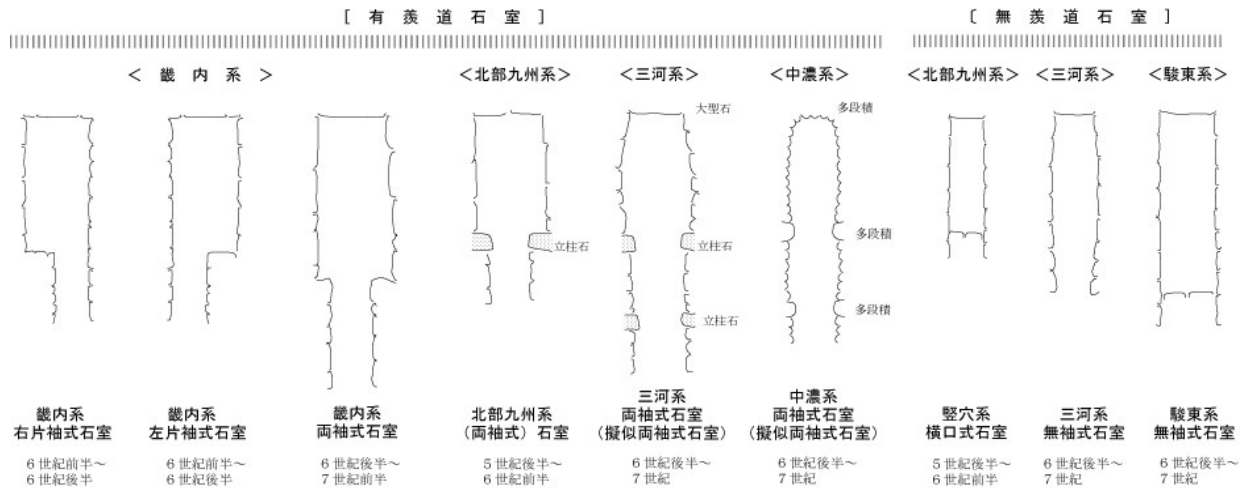


図2 東海地方における横穴式石室の分類

- 3) 玄室の天井は弧状ないしは傾斜をもつ
- 4) 明瞭な前壁を形成しない
- 5) 玄門や羨門に立柱石を多用する
- 6) 玄門や羨門を内側に突出させることが多い
- 7) 奥壁に大型石を用いる

これらの特徴の多くは北部九州の石室に遡源が迎れるが、特徴3)、4)、7)などは、地域において独自に発展した要素ともいえる。

**その他の有羨道非畿内系石室** 三河系石室成立以前の6世紀前半までの有羨道非畿内系石室は、形態規範が明確でない。ただし、いずれも北部九州の横穴式石室に属性の遡源が迎れることから、本稿では、北部九州系石室と呼んでおく。

有羨道石室については、三重県高倉山古墳のような、地域性が顕著な大型石室が南伊勢に知られている。畿内系石室と異なる要素として、玄室が長大化すること、玄門に立柱石をもつこと、天井が弧状であることなどがあげられ、伊勢に特徴的な石室として評価されている(竹内 2008)。これらの石室にみる非畿内的な要素はいずれも三河系石室に遡源が迎れるものであり、畿内系石室に在来的な要素が加わった変容形態と評価しうる<sup>3)</sup>。

**無羨道石室の系譜** 無羨道石室も、主に三河において受容されるが、その導入の初期には北部九州にみられる竪穴系横口式石室との関連が想定できるものがある。一方、6世紀後半以降の無羨道石室には、明確に系譜がたどれないものが多いが、三河系両袖式石室と共通する形態的特徴をもつものについては、同一系統の石室と捉えられる。

## 2 横穴式石室の分布と展開

**5世紀後半** 東海地方において横穴式石室が導入されるのは5世紀後半であり、その全てが北部九州系の横穴式石室である。三重県おじよか古墳、愛知県経ヶ峰1号墳、愛知県中ノ郷古墳の石室が相当する(図4)。

**6世紀前半** 東海地方における畿内系石室の伝播は、北部九州系石室に遅れ6世紀前半(MT15~TK10型式期)になって始まる。この段階に東海地方に導入された畿内系石室は片袖式石室であり、原東山道や原東海道をそれぞれ伝播経路として想定することができる(図3)。

畿内系石室の導入地が、北部九州系石室の主要受容地や、その系譜を引く三河系石室の成立地域と異なる点は重要である。畿内系石室の情報発信源と考えられる倭王権やその周辺勢力との結びつきの差異が、採用される横穴式石室の系統差に反映されていると評価できる。

畿内系石室は倭王権との関係をあとづける埋葬施設と評価できるが、東海における畿内系石室は、地域内における変容が随所にみられることは留意しておかなければならない。岐阜県中切古墳(前方後円墳)の石室は伸長化が顕著であり、静岡県興覚寺後古墳(前方後円墳)の石室には腰石的な配置がみられ奥壁隅角の解消も顕著である。

また、6世紀前半には、竪穴系横口式石室が広域に分布するようになり、石室の大型化や長大化、開口部における段構造の省略など地域内での変容が顕著に進行する。竪穴系横口式石室の構築数で他地域を圧倒するのは西三河であり、変遷過程も明瞭である。

**6世紀後半~7世紀初頭** 6世紀後半~7世紀初頭(TK43~TK209型式期)においても、畿内系石室の

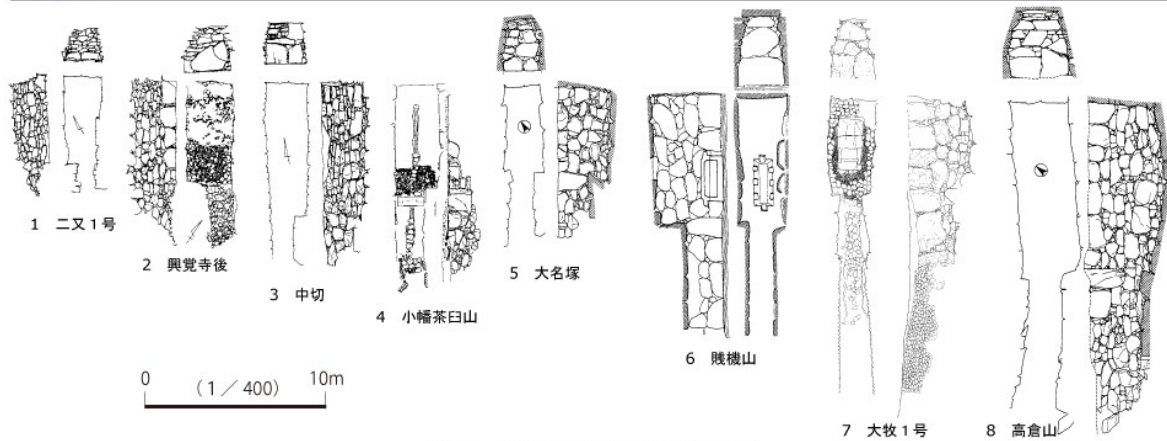
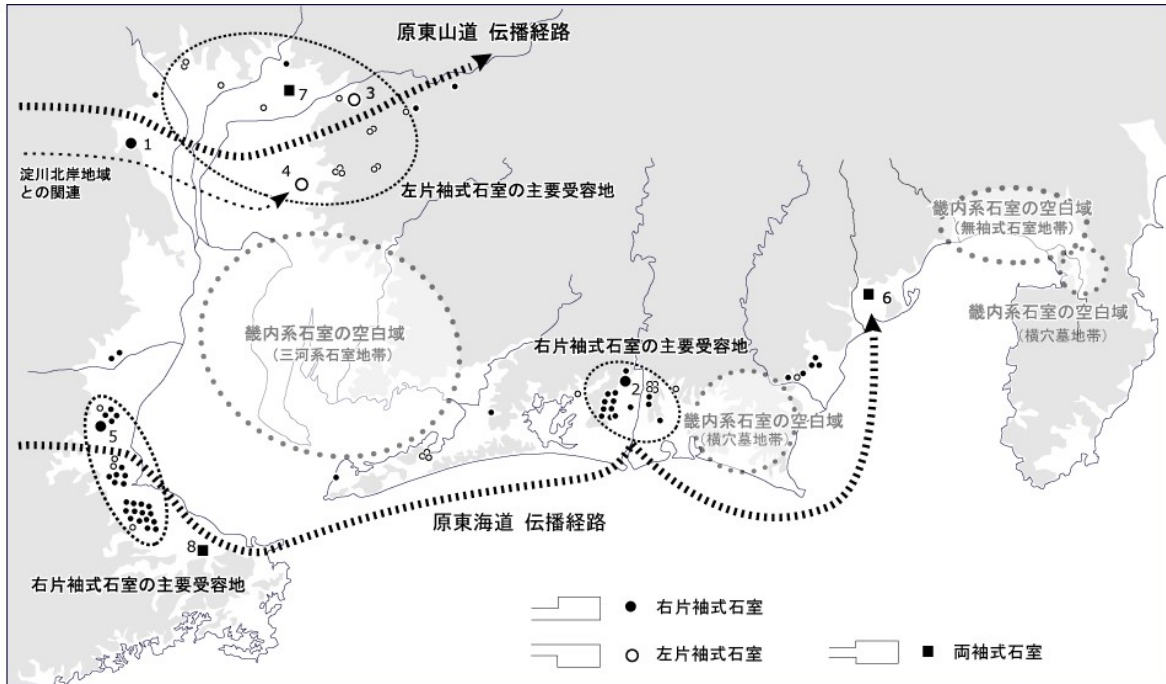


図3 畿内系横穴式石室の展開

主要分布地は6世紀前半代と大きな違いがみられない。この段階の畿内系石室は両袖式石室に変化するが、原東山道、原東海道の有力首長墳に畿内系石室が構築されている。この段階においても、先に片袖式石室のみたような、地域内での変容が顕著である。

三河系石室は、北部九州系石室を祖形に、複室構造、天井形態など九州的な石室の要素を取り入れて6世紀中葉(TK10型式新相期)に成立する。その成立過程は、愛知県不動1号墳や愛知県池ノ表古墳など西三河の矢作川中下流域において明確に辿ることができる(岩原2006)。三河系石室の形態的特長は東西三河で共有され、7世紀初頭までに東海各地に浸透していく。遠江や駿河へは、三河系石室の諸特徴を比較的保ちながら伝播している。

### 3 横穴式木室と被葬者の出自

**横穴式木室の分布と展開** 横穴式木室とは、木材を用いて墓室をつくりあげる埋葬施設であり、羨道にあたる開口部をもつ。木材の間には粘土を充填するものがあるが、粘土の痕跡が不明確なものも多い。

東海地方における横穴式木室墳は、中南伊勢(安濃川北岸・五十鈴川流域)と西中遠江(天竜川・太田川流域)を中心に分布する。その確認数も、総数50基程度と横穴式石室や横穴と比べて極めて少ない。

**横穴式木室の諸特徴** 横穴式木室の出現時期は、伊勢と遠江でほぼ同時であり、6世紀前葉である。両地域とも小型ながらも前方後円墳の埋葬施設に採用されており、被葬者は中小の首長階層や彼らを支える有力者層であったことがうかがえる。

横穴式木室墳の被葬者の性格を決定づけるに特徴的な副葬品目も見出しがたいが、横穴式木室が立地する地域の近隣には須恵器生産地があることが多く、その

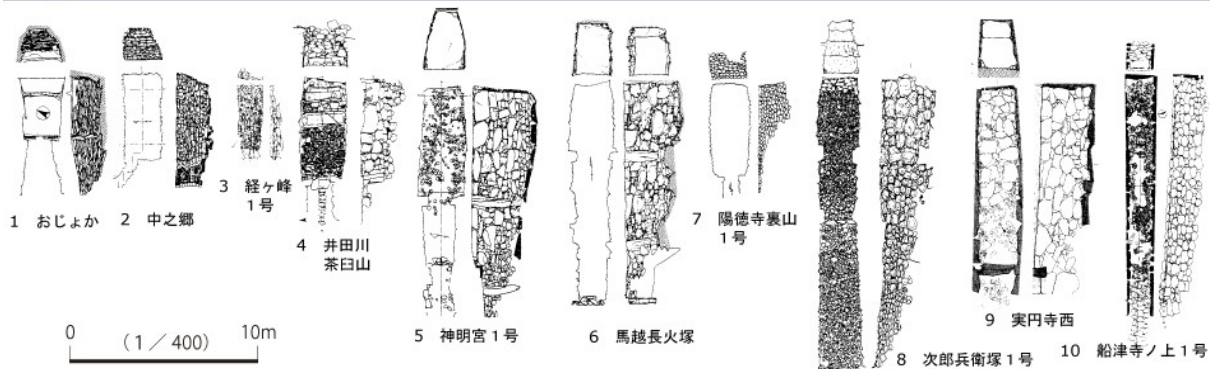
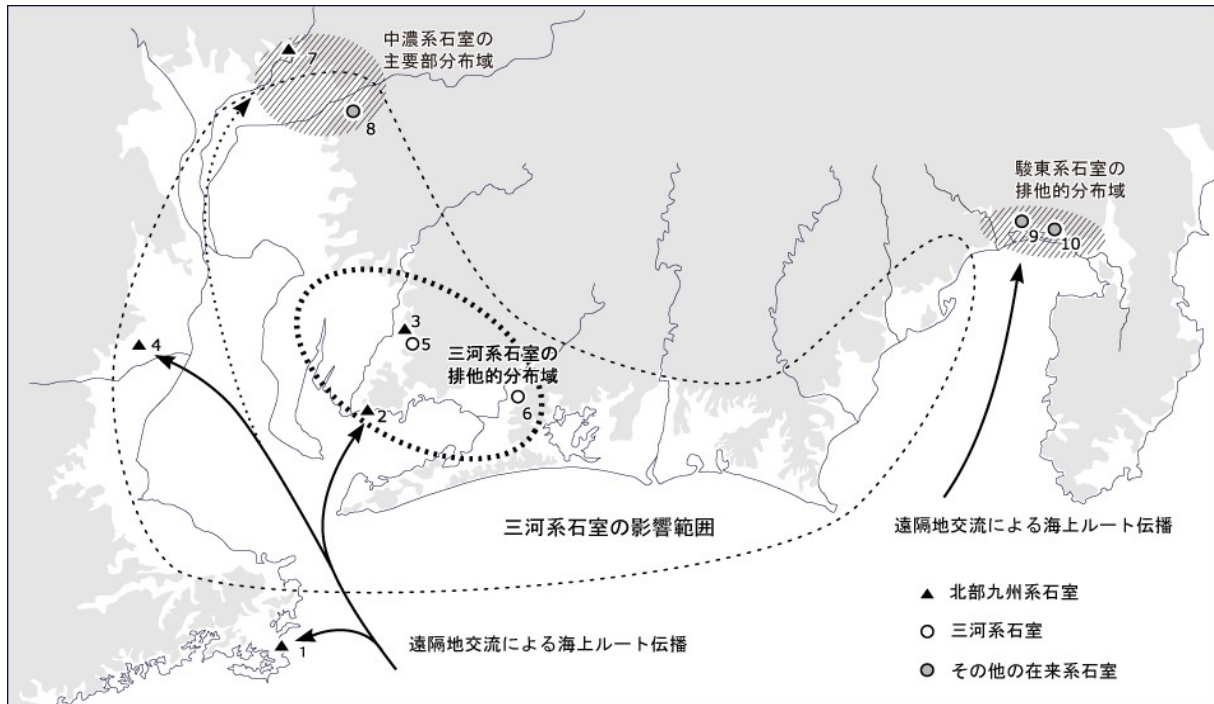


図4 在来系横穴式石室の展開

被葬者を須恵器生産に関与した人物と捉えることがある。横穴式木室の墓室内には墓室を燃焼させたものがあり、この行為も須恵器生産と関連づけて解釈されている。ただし、すべての横穴式木室の被葬者を須恵器生産の担い手と捉えることも困難である。横穴式木室の被葬者を考えるにあたっては、本質的な特徴、すなわち、木材を用いて墓室を構築すること自体に注目しておくことが大事であろう。

横穴式木室の分布域は、横穴式石室の分布域と重なることから、横穴式木室の構築は古墳の立地環境に起因するものではない。木材を用いて墓室を作り出すことに、構築集団の個性が表されたものと捉えることができる。木材を組み合わせて空間を作り出す点は、大壁建物との類似が指摘できる。渡来系の建物構造との相関は、横穴式木室構築者の出自を考える上で重要な要素と捉えられる。横穴式木室墳の被葬者を須恵器生

産に限らず、鍛冶集団や土木技術者といった渡来系技術者集団と関連づける評価は、墓室構造そのものの特徴から読み解くことが重要であろう。

**横穴式土坑の様相** 横穴式木室が構築される西中遠江には、壁体に木材や石を用いない横穴式土坑と呼ぶ小規模な埋葬施設が構築されている（鈴木 2008）。横穴式土坑とは、概ね以下の属性をもつ埋葬施設である。

- 1) 壁体は木や石を使用せず、土壁のままである
- 2) 墓室の幅一杯に床石を敷くものが多い
- 3) 断面が袋状を呈する傾向が強い
- 4) 天井の痕跡が残らない
- 5) 墓道が前面に接続する

横穴式木室との相違点として注目できる属性は、1)の壁体構造の特徴と、2)の床面の特徴である。横穴式木室の側壁基底部には、壁体に用いた木柱の痕跡が

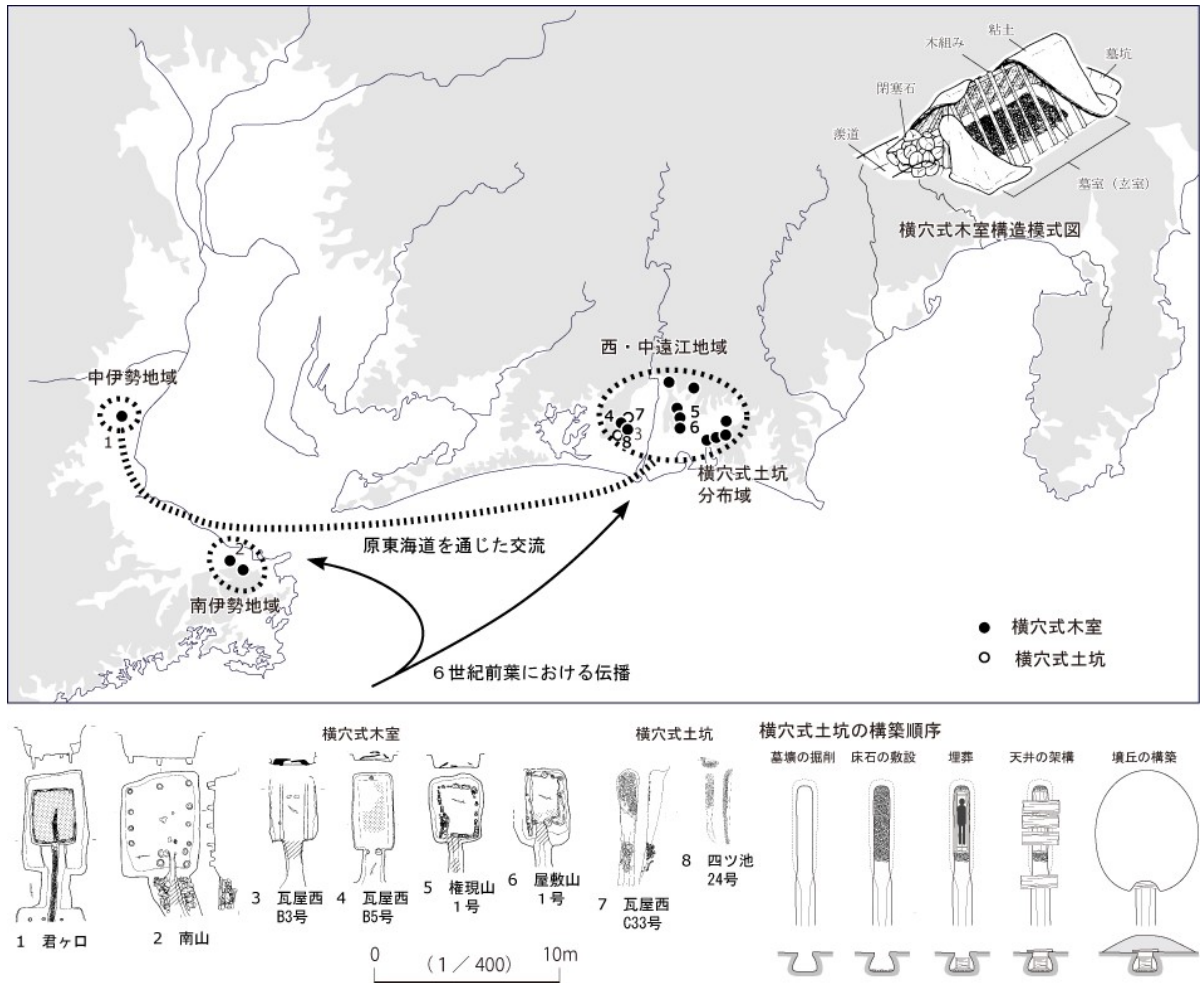


図5 横穴式木室の展開

残るので、床石が墓室の幅一杯に敷かれることがない。また、天井構造については不明な点が多いが、木材など有機物製の材が用いられたと考えられる。横穴式木室と横穴式土坑は、天井を木材で構築する点では共通するとみられるが、壁面を木材で構築するか、土壁のままとするかという違いがある。

横穴式土坑の規模は最大の事例でも幅1m程度で、墓室の長さも4m以下と小規模である。小規模な墓室であることから、単次葬を基本とする埋葬施設と考えられる。墳丘の有無については、明確に検討できる事例がないが、周溝を有する横穴式土坑墳があることから判断すると、若干の墳丘を有することが一般的であったと想定できる。横穴式土坑の出現時期は6世紀末(TK209型式期)であり、7世紀を通じて構築が続く。横穴式木室の衰退と前後して横穴式土坑が出現するあり方は、構造の類似や分布域の重なりとともに、両者が同一系譜の埋葬施設であることを伝えている。

横穴式土坑は、出現時期から追葬を意図しない単次

葬の古墳として構築されている。集団墓ではなく、個人に帰属する傾向の強い埋葬施設といえる。また、静岡県四ツ池古墳群では、横穴式石室墳に從属するように横穴式土坑が築かれている。この事例をみる限り、横穴式土坑の被葬者は、横穴式石室墳の被葬者集団に從属する立場であったことが分かる。

#### 4 横穴の分布と構築階層

**横穴の分布** 東海地方における横穴は、北伊勢、中東美濃地域(可児地域、土岐川上流域)、東遠江(原野谷川上流域以東)、中駿河(有度山麓)、北伊豆(狩野川流域)において集中的に構築されている(松井2001)。東遠江、北伊豆は、横穴式石室墳が少なく、横穴墓密集地である。とくに東遠江は横穴の構築数が1500基をこえ、東海地方の中では最も横穴が集中する地域である。このほか、横穴は飛騨においても認められるが、その構築規模は僅かである。

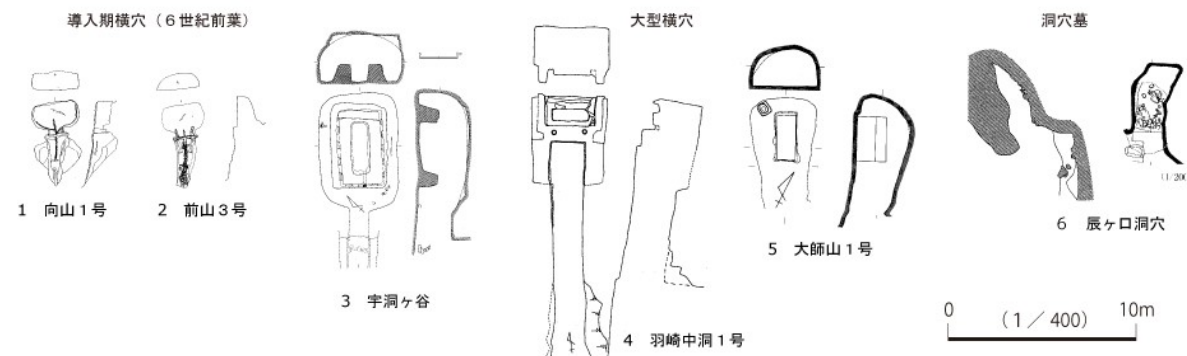
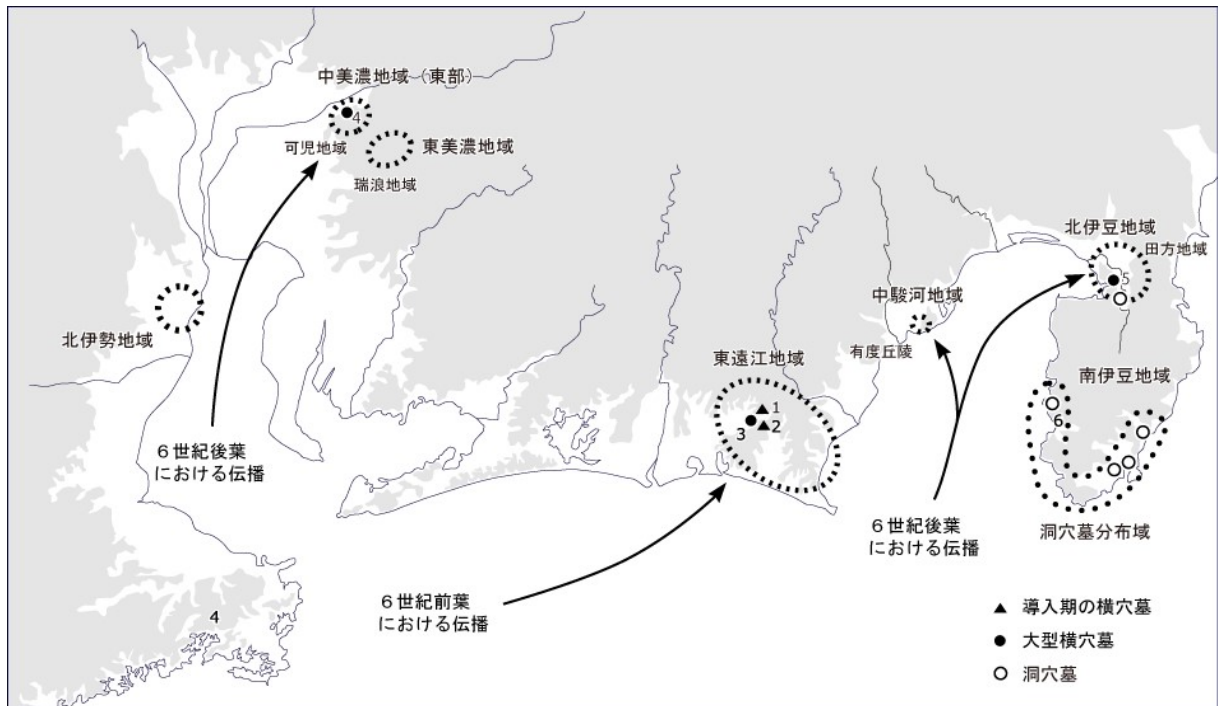


図6 横穴の展開

**横穴の構築時期** 東海地方における横穴の導入は、東遠江で最も早く、6世紀前葉にはじまる。古い段階の横穴の形態的特徴は、豊前地域の横穴墓群にみる諸特徴と共通することから、横穴式石室と同様に北部九州からの影響を受けて出現した可能性が高い。それ以外の地域でも、6世紀後葉のうちに構築が始まり、7世紀を通じて多くの横穴が築かれる。また、北伊豆でも約800基の横穴が密集するが、その多くは、7世紀後半から8世紀にかけての比較的新しい時期のもので占められる。

**首長墓としての横穴墓** 横穴は一般的に横穴式石室よりも下位の階層が築造した埋葬施設と捉えられるが、東遠江や中美濃、北伊豆においては、墓室が極めて大きく石棺を埋葬施設にもつなど、地域における最上位の横穴式石室墳に匹敵する横穴墓が知られている。首長墓級の大型横穴墓が構築される東遠江、中美濃、

北伊豆の各地域は、横穴式石室の構築が低調であるか、横穴式石室が構築されたとしても畿内系石室の影響がみられないといった地域性がある。横穴の密集地帯である東遠江や北伊豆では、古墳を築く階層の多くが横穴を構築し、最上位階層も横穴墓に埋葬される独特の階層秩序があったと評価できる。

### 5 横穴系埋葬施設の多様性と階層

**地域的特性** ここまでの検討によって、東海地方の各地には実に多様な横穴系埋葬施設が展開していることを紹介した。その地域性については、概ね表1のように整理することができる。律令制下における数郡程度のまとまりをもつ地域の中で、共通した埋葬施設が構築されていると評価しうるだろう。

なかでも、畿内系石室を継続的に採用する地域と、畿内系石室が見られない地域との違いは鮮明である。

その特徴を類型化すると、概ね以下のように整理できる。

第一地域 畿内系石室の主要受容地域  
伊賀・中伊勢・西美濃・飛騨・尾張・西遠江・中遠江・中駿河

第二地域 在来系石室の発展地域  
西三河・東三河・中美濃・東駿河

第三地域 横穴の主要受容地域  
東遠江・北伊豆

第四地域 洞穴墓の受容地域  
南伊豆

第一地域は倭王権との直接的関係が強く、各地域において、中心周縁関係を形づくる中核な地域と評価しうる。第二・第三地域は、倭王権との関係においてやや独立した立場を維持する地域や、倭王権もしくは各地の中核的な地域との密接な関係を背景に独自性を発揮した地域といえる。在来系横穴式石室や横穴など、非畿内系墓制の情報発信地となる点で、地域性の発露が顕著である。第四地域は、横穴式石室墳や横穴墓の築造に刺激を受けて新たに造墓活動を始める古墳築造の外縁地域と評価できるだろう。

**階層性** 横穴系埋葬施設の階層性については、時期を限定して整理する必要がある。横穴系埋葬施設の導入期もしくは受容の初期段階である5世紀後葉から6世紀前半においては、横穴系埋葬施設の構築数そのものが限られる。この段階においては、上位の首長層と、新興の集団や地域において横穴系埋葬施設が導入されているといえるだろう。6世紀に畿内系石室が導入される地域では、上位階層が畿内系石室を、下位階層が在来的な埋葬施設を構築するという共通性がある。規模の差はあるが、畿内系石室が導入される初期の事例は前方後円墳であることが多く、近畿中枢部と共通する馬具が出土することも高頻度で確認できる。

6世紀後半から7世紀初頭頃になると、在来系の横穴式石室や横穴の特徴が明確になり、上位階層から比較的下位の階層まで横穴系埋葬施設を構築するようになる。各地域において、最有力階層から中小規模の古墳造営者層まで、横穴式埋葬施設という等しい埋葬原理が貫かれているこの時期こそ、横穴系埋葬施設の階層性を明確に分析しうるといえるだろう。この時期は、前方後円墳の築造数も限られる。墳形や外表施設より、相対的に墓室への比重が高まった、新しい古墳造営の秩序が成立した段階と評価できるだろう。

この段階の古墳造営秩序においては、墓室のこだわ

表1 各地域の埋葬施設

地域	横穴式石室			横穴式木室	横穴	木棺直葬	洞穴墓
	畿内系	非畿内系					
		北部九州系	在来系				
伊賀	◎						
北伊勢	○	◎	○	△	△	△	
中伊勢	◎		○	△		△	
南伊勢	○		◎	○		◎	
志摩	○	△	○				
飛騨	◎		○		△		
西美濃	◎		○				
中美濃(西)	◎	△	○				
中美濃(東)			◎		◎		
東美濃			○		△		
尾張	◎		○				
西三河		△	◎				
東三河			◎				
西遠江	◎		○	○			
中遠江	◎		○	○			
東遠江			△	△	◎		
西駿河	◎		○				
中駿河	◎		○		△		
東駿河			◎				
北伊豆			○		◎		△
南伊豆							○

凡例

- ◎：最上位を含む階層に受容
- ：中・下位階層を中心に主体的に受容
- △：中・下位階層を中心に客的に受容

りが頂点に達していたとみられる。有力階層は、墓室の規模を大きくすることに労力を費やし、巨石への指向が顕著になる。墓室の規模と築造集団の階層的位置は相関関係があるとみて間違いはない。

横穴系埋葬施設には、規模と形態の二重原理によって被葬者の社会的位置が示されていると捉えられる。墓室の規模の大小には被葬者の階層差が、埋葬施設の形態の違いには、職掌や出自、倭王権との関係の強弱、地域社会での役割の違いなどが反映されていると捉えられる。

畿内系石室は、相対的に上位の埋葬施設であるが、この時期の最新形式である両袖式石室が上位に、前時代的な片袖式石室は下位の埋葬施設として用いられていることが墓室の大きさからうかがえる。また、畿内系石室が導入されない地域においては在来系石室を大型化させたものが、最上位階層の古墳に採用される。在来系石室が支配的な地域では上位階層に複室構造の石室を用いることが多く、相対的に劣位の古墳の石室には、単室構造や、無袖式のもの採用されている。また、東駿河では、構築される石室が無袖式に限定されるので、単純に墓室の大きさから階層差を読み取ることができる。

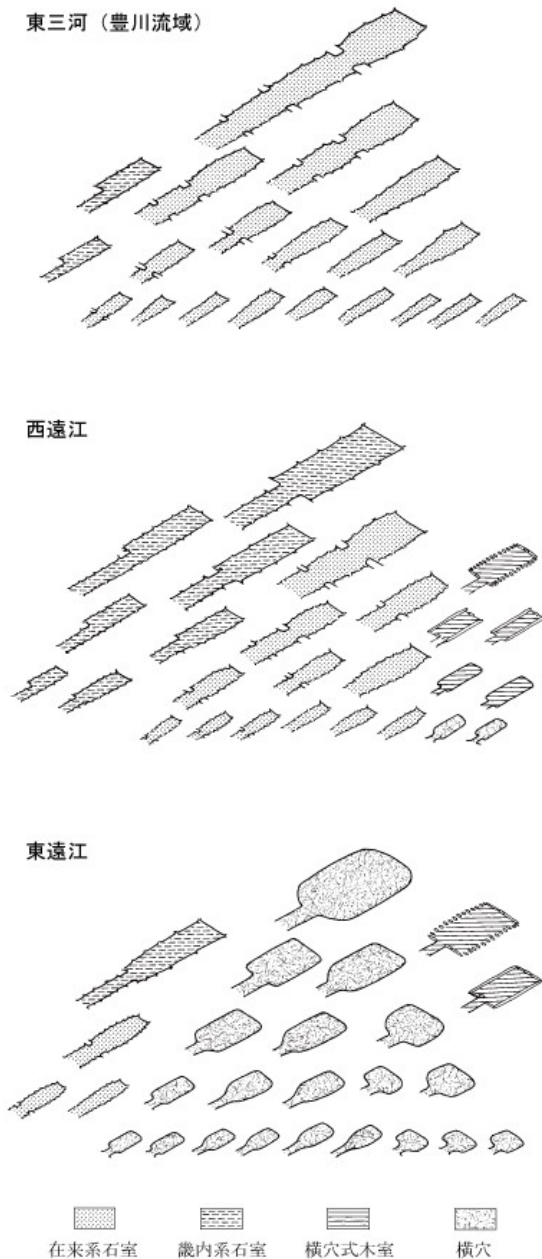


図7 横穴系埋葬施設の階層性

横穴式石室が基本的に構築されない東遠江や北伊豆では、先に触れたように横穴墓が最高位の埋葬施設として採用され、下位階層まで横穴を構築する。これらの地域においても、墓室の大きさが階層差を読み取る最も重要な属性といえる。

図7は、東三河、西遠江、東遠江諸地域における横穴系埋葬施設の階層性をモデル化したものである。遠江においては、横穴墓が集中的に構築される東部と、横穴式石室墳が集中的に築かれる西部では、全く異なる埋葬施設の築造原理が働いている。また、東三河は西遠江と同じく横穴式石室墳が構築されるが、最上位

階層に採用される石室の系統は西遠江とは異なり、三河系石室に限定される。

### 結 語

本論では、東海地方における横穴系埋葬施設の多様性を紹介することを通じ、浜松地域の特性について触れてきた。畿内系石室の主要受容地については、倭王権と関連が強い地域秩序が想定でき、各地域で共通性が高い階層構造を復元しうる。浜松では、畿内系石室をはじめとした、実に多様な横穴式石室が構築されている。上位階層は、倭王権との繋がりが強い一方で、様々な出自をもつ集団がそれぞれ特徴ある埋葬施設を構築した地域であると評価できるだろう。

### 【註】

- 1) 基底部構造から分類するなら、「有袖石室」、「無袖石室」と捉えるべきであるが、大分類の機軸はあくまでも羨道の有無であることを強調しておきたい。
- 2) 地域研究においては、「疑似両袖式石室」と呼ばれることが多い。
- 3) 本稿では、高倉山古墳の石室について、畿内系石室の変容形態として評価しておく。

### 【文献】(五〇音順)

- 岩原剛 2006 「三河の横穴式石室と地域間交流」『古墳時代における地域と集団Ⅱ—横穴式石室からみた伊勢と三河の交流—』第7回考古学研究会東海例会
- 菊池吉修・田村隆太郎 2001 「駿河・伊豆の後期古墳」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム
- 静岡県考古学会 2001 『東海の後穴墓』
- 鈴木一有 2001 「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム
- 鈴木一有 2007 「東海の後穴式石室における分布と伝播」『研究集会 近畿の後穴式石室』横穴式石室研究会
- 鈴木一有 2008 「横穴式土壇の系譜」『四ツ池古墳群2次』(財)浜松市文化振興財団
- 鈴木一有 2013 「7世紀における地域拠点の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木一有 2016 「中原4号墳から出土した生産用具が提起する問題」『伝法中原古墳群』富士市教育委員会
- 竹内英昭 1995 「三重県の後穴式石室研究」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号
- 竹内英昭 2008 「伊勢地域の横穴式石室の構造と展開」『東海の後穴風景』雄山閣
- 田村隆太郎 2008 「東海の後穴式木室と葬送」『東海の後穴風景』雄山閣
- 土生田純之 1994 「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版
- 土生田純之(編) 2010 『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 服部哲也 1997 「名古屋小幡茶臼山古墳の再検討」『古文化論叢—伊達先生古希記念論集—』